In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	秘伝と歌舞伎女方の理論化
Author	中島 那奈子
Citation	都市文化研究. 23 巻, p.182-183.
Issue Date	2021-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 ： 都市文化研究センター
Description	書評 / Maki Isaka Morinaga, Secrecy in Japanese Arts："Secret Transmission" as a Mode of Knowledge. New York：Palgrave Macmillan, 2005; pp.197. / Maki Isaka, Onnagata: A Labyrinth of Gendering in Kabuki Theater. Seattle and London：University of Washington Press, 2016; pp.xvi+256
DOI	10.24544/ocu.20210421-002

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市文化研究 第23号 2021年3月182-183頁
Studies in Urban Cultures Vol. 23, March 2021 pp. 182-183

書評

秘伝と歌舞伎女方の理論化

中島那奈子

この書評では，マキ・イサカ・モリナガによる二つの書籍を取り上げる。

「なぜ日本の演劇では，秘密が多いのですか？」評者は，ドイツ人の演劇研究者から，日本演劇への素朴な疑問を投げかけられたことがある。欧米演劇での理路整然とした理論とは対照的に，日本演劇に関する記述では，ことあるごとにこの「秘伝」が登場し，研究者をパニックに陥らせる。加えて，「秘伝」が古典だけでなく，現代でも日常的に使われることも，問題をさらに複雑にさせている。米国ミネソタ大学で教鞭を執るイサカは，日本の芸能における知のあり方「秘伝」を扱う研究が，歌舞伎の女方研究から始まったことを述べている。秘伝を扱うこの書籍 *Secrecy in Japanese Arts: "Secret Transmission" as a Mode of Knowledge* でイサカは，日本の芸術や芸能において，どのように知識が秘伝を通して伝達されたかを，明らかにする。イサカはここで，伝えられた知識の内容ではなく，知識の伝達の仕方に焦点をあてる。先行研究である日本国外の研究（例えばジャネット・イケダの細川幽斎論）に加え，熊倉功夫の「秘伝の思想」や西山松之助による「家元の研究」を乗り越える形で，ジェンダーを巡るアイデンティティポリティックス，歴史の再構築，日本の芸道論が，非常に洗練された形で同じ議論の地平に置かれる。

本の内容は，以下の6章に分かれる。「秘伝への探究」「秘伝の展開」「知識の伝達と創造」「秘め事，啓発を隠すこと」「秘伝と近代」「私たちの秘伝」となる。興味深いのは，第2章で柳生宗矩の『兵法家伝書』，第3章で世阿弥元清の『風姿花伝』，そして第4章では，数々の秘伝を紐解いて言語への懐疑を検証してから，第5章において新劇運動を牽引した演出家の小山内薫を取り上げることである。自由劇場や築地小劇場を設立した小山内は，戯曲や演劇理論書の翻訳も手掛け，自身の演劇理論書も出版している。イサカによれば，西洋の概念を翻訳する小山内に見られる論理の矛盾は，それまで支配的であった秘伝の考えが近代と衝突する，認識論的な緊張である。秘伝という視点からは首尾一貫している小山内の思考が，近代的思考で捉え直されると，その翻訳の過程で思考に矛盾が生じるのである。

芸に関わる秘伝は，空海の説いた真言密教に由来すると考えられる一方で，両者における秘伝の考え方は大きく異なるという。密教では，法に背く知の伝達は未来の世代へも，禍を起こすものとされる。したがって，密教の教義での沈黙の重要性は，その濫用が大惨事を起こすほどに言語が力を持つという理解に由来する（pp. 4−6）。秘伝は比喩で記されることが多いため，その比喩を読み解く能力が後継者にない場合は意味をなさない。そこで，イサカは，秘伝における聞書の形式（Hearsay）が，秘伝における過去の構築であることに着目する。聞書は，書き手と過去とを接続するが，ここでは事実としての過去ではなく，想像された過去が構築される（pp. 48−49）。

加えて，イサカは，現代の視点からこの秘伝を読み解くことの危険性も示唆する。その一例が，世阿弥の研究に見受けられる。近代の研究において，創造性とオリジナリティは，相互交換可能なものとされるが，この二つの関係は世阿弥においては異なっていた。世阿弥においては，オリジナリティではなく創造性こそが重要であったという（p. 59）。

不適切な知の伝達が，伝統を脅かすように，適切な知の伝達は，伝統を補強する。そのような知の伝達はグループの内部で行われるべきで，その意味で秘伝の実践は排他的なものとなる。イサカによると，秘伝の三つの目的は，知の占有，知の運営，そして知の伝達である。そして，家元制度による血縁と能力を備えることが，究極の内部者である後継者に要求される（pp. 63−65）。

師匠から秘伝を理解する弟子へといった，一子相伝制を完成形とする家元制度は，近代以降も形を変えながら存続した。技術の客観的評価が難しい，能楽や舞踊といった芸能で，家元制度は伝統の継承に重要な役目を果たしている。日本の芸能では，実践のない芸術理解は存在せず，芸の実践には実践偏重の理論が浸透する。そして，芸の実践は芸の鑑賞に役立つ。加えて，日本の芸能においては，個性的な芸術作品が生まれるよりも，何年間修行したかが重要視される。芸能における，言語への懐疑，秘伝による知の伝達には，このような経験主義，いわば，＜老い＞への傾倒が根底にある。

もう一つの書籍 *Onnagata: A Labyrinth of Gendering in Kabuki Theater* において，イサカは歌舞伎史の緻密な検証の上に，女性らしさとジェンダーの理論化を展開する。歌舞伎の女方には，男性だけでなく「女性による女方」も活躍していた。この，「女性による女方」という議論の前提には，ジェンダーの視点か

ら歌舞伎の近代を再考する，批判的読み直しがある。加えて，生物学的に「自然な」身体という概念や，女方と女優の対立は，近代的に構築されたものだと説明する。日本語と英語の文献を駆使し，双方の研究動向を丁寧に追いつつ，文化的かつ学究的背景のために，先行研究が見落とした隙間を埋めていく手腕はスリリングである。

1629年（寛永6年）の女歌舞伎への禁令によって，17世紀までに，歌舞伎は男性のみによる芸能として確立する。ただ，歌舞伎史においては，「女性による女方」も存在した。しかし，「女性による女方」は，歌舞伎のドラマトゥルギーでは主流とは考えられず，これまで十分な研究的関心が集まらなかったという。「（男性の）女方の芸術性」を作り上げた近代の装置によって，「女性による女方」が歴史から疎外されていった時，イサカは，ここでなぜ（何によって，どのような理由から）「女性による女方」が周縁化されたかを，第1章で明らかにする。

第2章では若衆歌舞伎をとりあげ，ここでの封建的主従関係から，18世紀に至って，女性と女方が相互にその芸を模倣するようになることを説明する。女方はその一世紀の間に，両性具有的な美学を通して，理想的な女性らしさへと，過激に変容した。第3章から第5章にかけては，女方初代芳澤あやめによる「あやめぐさ」で女方の芸が完成されたことを，キャサリン・メズールや河竹登志夫，服部幸雄や郡司正勝の研究を参照しながら，説明していく。第6章では，歌舞伎における身体と，複数のリアリティ，そして再現／表象の問題を，動きの側面から探求し，武智鉄二の「なんば」論 や「人形振り」といったテーマを取りあげていく。

第7章では，座敷歌舞伎やお狂言師，そして明治期になって公に活躍できるようになった女役者を取り上げ，「女性による女方」市川久女八（初代）の歌舞伎史における再評価へとつなげていく。歌舞伎の男性世界を背負う「女性による女方」は，師匠の説くステレオタイプ的な女性らしさを演じるという。女團十郎と呼ばれた，女性の久女八への一般的な評価も，男性の女方をどれほど巧みに模倣するかにあった。ここでイサカは，この「女性による女方」のメカニズムと芸の伝統を結びつける。「義太夫や歌舞伎の集まりなど，先達者を真似ることで芸が身につき，芸の伝統を男性が占有する理論的枠組みにおいては，男性の先達者を模倣することが，女性にとって正統性や真正性を獲得し，伝統世界の一員と認められる唯一の方法である。これは，その共同体での地位を巧みに得るだけではない。（中略）この文脈では，創造性は伝統性と深く結びついて理論化され，真正な伝統という考えが最も重要であった。創造性は，真正な伝統に組み入れられた時に評価され，そうすることで正統性と真正性が保証される。」（p. 123）

そして，第8章は，紛れもなく女に見える八世岩井半四郎から六世中村歌右衛門へという橋渡しが，前近代的な女方から近代的な女方への転換であったことを指摘する。歌舞伎界出身ではない養子の歌右衛門にとって，歌舞伎の女方芸は，血で演じるものではなく，作られた芸術であったからである。イサカはこのように述べている。「ここでの芸術（文化）は，けして遺伝（自然）との対比で作られたものではなく，この二つはお互い絡み合って存在する。遺伝と芸術は共存し，その関係はどちらかが他方の原因でも結果でもない。遺伝と芸術の関係は，女方の芸術性と，女性らしさを専有するとされた女優の自然な身体との近代的対立とは，本質的に異なっている。この（芸の）修練というロジックは，『自然らしさ』という近代で優先されるようになった考えによって，完全に忘却されたわけではないにせよ，転覆させられたのである。」（p. 147）

一生にわたって継続し反復的に行う修練を通して，芸を身につけるというパフォーマティヴなメカニズムは，近代的「自然」とは相容れない。そこには，老いを前提にした，自らのあり方を長期的に変容させていく芸道の考えがある。芸術的ジェンダー（男性による女方）と生物学的ジェンダー（女性による女方）を二つに分ける考えこそ，近代の産物である。近代の前提を超え，自らの行為によってその人の在り方が変容する点に，女方というジェンダーのパフォーマティヴィティがある。

芸能史における女性史の研究は進んでいるものの，日本語の議論では，理論武装の強度が高まりにくい。日英の研究成果を丁寧に，かつ縦横に行き来して，どちらの立場にも批判的距離をとりながら，伝統芸能や日本社会が抱える問題を照射する。この二つの書籍が，「女方」や「秘伝」の理論化を成し遂げていることに，敬意を評したい。

【書評文献】

Maki Isaka Morinaga, *Secrecy in Japanese Arts: "Secret Transmission" as a Mode of Knowledge*. New York: Palgrave Macmillan, 2005; pp. 197.

Maki Isaka, *Onnagata: A Labyrinth of Gendering in Kabuki Theater*. Seattle and London: University of Washington Press, 2016; pp. xvi + 256.

（大阪市立大学大学院文学研究科 UCRC研究員，
ベルリン自由大学ヴァレスカ・ゲルト記念客員教授 2019／2020，
京都芸術大学・神戸女学院大学・成蹊大学・
成城大学・早稲田大学 非常勤講師）

【2020年8月28日受付／2020年11月6日受理】